

Progressive39

ウェイトレス 嬰イ短調

表紙

天野拓美

目次

こんなウエイトレスのいる店には行きたくない！

「土曜日 午後一時五十七分 就業開始」

真冬真

挿絵／天野拓美 5

給仕の怪

村山慶

挿絵／村山慶 13

こんなウエイトレスのいる店には行きたくない！

「土曜日 午後二時三十六分 アイドルタイム・店頭掃除」

真冬真

挿絵／天野拓美 27

ハルウサギのユウウツ

広沢りょうた

33

カミガミの夢

成重鈴太郎

挿絵／村山慶 51

こんなウエイトレスのいる店には行きたくない！

「土曜日 午後三時五十一分 休憩・突発事態」

真冬真

挿絵／天野拓美 67

食堂車へ、ようこそ

廣瀬川 綾

75

こちら高崎機関区横川派出所です！ 番外編

こんなウエイトレスのいる店には行きたくない！

「土曜日 午後四時十七分 終業時間・帰り道」

真冬真

挿絵／天野拓美 89

こんなウェイドレスの
いる店には行きたくない！

土曜日 午後一時五十七分 就業開始

真冬真

なんだと



「チーッス！」

元気な声と共に「REST ROOM」と書かれた扉が威勢よく開け放たれる。体当たりする勢いで汗だくになりながら転がり込んだ来たのは、ショートカットで少年体形な少女だった。年の頃は高校生くらいだが、化粧っ気がないせいもあってややつつましやかながらも膨らんでる胸がなければ本当に男の子かと思間違えそうになる。

「……ちーっす」

休憩室のテーブルにだるそうに突っ伏してるひとときわちんまりとした少女が、手を上げるのもめんどくさいとばかりに気だるげに返す。左右でくくられたツーサイドテーブルがやっぱりやる気なさげに机の天板の上でだれていた。ダレダレにダレすぎて今にも溶けて流れそうだ。

だがそんなよどんだ空気も、飛び込んできた少女はまったく意に介してなかった。

「ねえねえ見て見てほら時計間に合ったでしょ間に合ったよ見てよすごいよすごいでしょはじめてバイトに間に合ったよほらほら言ったじゃんあたしはやれば出来る子だって

あたしもうすうすうじゃないかと思ってたけどやっぱりそうでしょほらほらひよりもそう思うでしょやっばそうだよねそう思うよねほめてほめてもっとほめてあがめたてまつちやったりなんかしてもぜんぜんおっけーなんつってもあたしつてばツメを隠したトンビだからあれトンビだつてタカだつてそう言えば赤唐辛子のことなんでタカのツメって言うのかなあたしこの前まで知らなくてフツーに赤い唐辛子って言ってたよねえねえひよりは知ってた知らなかったどっちそういえば唐辛子って言えばししとうって辛いと思ってたけどあれ辛くないって教えてもらってこないだ初めて食べたんだけど食べたのがたまたま辛いししとうでししとうって中には辛いのもあるんだって言うんだけどあれしか食べてないからわかんないよねうそかもだよねもしかしたらあたしをはめる陰謀かもね陰謀って言えばネットで見ただアメリカの月着陸って……」

ハアハアと荒い息の合間によくもこれだけと思うほど一気呵成一方的にしやべりまくっていた。

飛び込んできた運動エネルギーがそのまま変換された大音響の、句読点もない騒音の垂れ流しに、突っ伏していた少女の額に逆Y字のペンツマークみたいな血管がくつきりはつきり浮き出た。「あく、ちよーうぜえ……」

「あく、もう、うるさい！」

二人とは別の方向から「バンツ」と音が飛ぶ。休憩室の中のさらに壁で区切られた区画で、もう一人の眼鏡の少女がパソコンの画面を前にキーボードに「ばー」に開いた両手を思い切り叩きつけていた。二人よりも上背があるせい

かちよつと大人びて見えたが、年の頃は同じくらいだろう。長い髪を後ろでまるめてネットとまとめているのも、その一因だろう。

「貴子！ 時間に間に合つたくらいではしゃぐんじやない！ 第一時間ギリギリでしょ！ 時間前に来て制服に着替えておくように何度も言つてるじやない。あ、タイムカードは着替えてからだからね」

「度自分のカードをタイムレコーダーに通そうとしていた貴子は、その言葉にびくつとして慌ててカードを機械のスリットに通してしまつた。

「あ、あたしやつてないよ？」

子どもがつまみ食いで口をいっぱいにしたまま「あたし、食べてないもん！」と言つてるような支離滅裂さに、眼鏡の少女は呆れてものも言えずにただただ深いため息を吐く。

「……もういいからさつさと着替えてきて。それと何度も言つてるけど、挨拶は『ちいっす』じゃなく『おはようございます』！」

「えく？ だつて真琴。もうお昼過ぎだよ？」

「二十四時間やつてるところの挨拶は朝昼晩関係なく『おはようございます』なの！ 口答えしないでさつさと着替える！」

「そうだぞー。さつさと着替えてはたらけはたらけ」

さつきからだれつばなしのひよりが、真琴と呼ばれた眼鏡少女の尻馬に乗る。

「あんたもだつての！ 休憩時間じゃないんだからちゃん

と仕事しろ！」もう一度キーボードがバン、とはたかれる。このままだとキーボードが真琴専用の打楽器に認定されてしまいそうだ。

「だつてえ、客来ないしい、ヒマだしい」

「お客さんが来なくても仕事あるでしょ！ テーブル拭き、ポーシヨンチェックに店先の掃除……」

「ヤダ。メンドクサイ。パス」

カタカナ三語で済ます態度にまた真琴が切れてやいのやいのとわめく。貴子はそれから逃げるように、休憩室の奥にある更衣室へとずりりと入つていった。

そう、貴子と他の二人では決定的な違いがあつた。貴子は私服のパーカーとデニムのショートパンツ姿だったが、他の二人はエプロンドレス姿——ひよりのはオレンジで真琴のはミントグリーンという違いはあつたが、同じデザイン

の制服だつた。
「へへへ。緑の制服になつた方はさすがにちがいますね。お偉いですね。さすがフロアチーフさままででございますね」

「タチ悪いな。逆ギレか？ あんたが働かなさすぎなの！ 働け！」

「はたらいたら、まけかなと、おもつてる」

ダレたまま、ニート丸出しな自由律俳句が詠まれる。山頭火もびつくりだろう。

「お前ここになにににに來てるんだよ！ バイトだろ!? 働け！ むしろ馬車馬みたいに！」

「帝国主義的資本家の走狗と化した友は、かくのごとく親

友から血も涙もない搾取をしようとするのであった。フロム、ファミレス蟹工船」

「そういうことはまともにも勤勞意欲見せてから言え！ つーか小林多喜二読んだことないだろ、お前！」

『蟹工船』って『蟹光線』だと思ふよね、ふっー。『あゝ無情』って最近まで『アーム・ジュー』だつて思つてたし」

「思いっきり話をこまかすな！」
突っ伏したひよりの顔面から「ぷくく」と堪え笑いが漏れた。「うぎぎ……おもしろ……うぎぎ……」

真琴がひよりの後ろ頭めがけディスプレイを振り上げようとしたりとところで、更衣室のドアがまたまた勢いよく開かれた。

「ジャ、ジャーン！ 着替えました！」

ひよりと同じオレンジのエプロンドレスに着替えた貴子が飛び出した。

すっかり毒気を抜かれ、真琴がディスプレイにかけてた手を離す。

「いや、いちいち報告せんでいいから」

『『仕事のほうれんそう』は大事だよ！ 報告！ 連絡！ 早退？』

「出勤したばっかで早退してどうするの。また聞きかじりで……あく、こちら。ちよつと待て。そのままで行くなつて」

店先ががっしがっしと大股で向かおうとしたところを呼び止められ、「ほへ？」と貴子が振り返る。

「汗だくだつたけど、ちゃんと汗拭いた？」

「うん！ 白いスポーツバッグに、タオルあったから！」
それを聞くや否や、今までテーブルでダレてたひよりががばつと跳ね起きる。両サイドにまとめた髪が勢いで跳ね上がり、へびみたいにうねつた。

「ちよつ！ それあたしのバッグ！ あたしのタオル！」
「自分の忘れちゃったから」と、てへへ笑う。

「勝手に使うなよ！ せめて一言断れよ！」ひより涙目。
脇で真琴がうーんとうなる。

「言つてることは間違つてないんだけど、ひよりが言うあまり正論に聞こえないのはなんでだろう？」

「ひどいつ！ それ偏見！」
「まあ、この次からちゃんと許可取つて使うんだぞ」
だがその抗議はさくつと無視される。

「うーっす」

「あと、ボタンずれてる、ボタン」
そう言つて真琴は自分のブラウスの前を手のひらでぼんぼんと叩く。貴子がじつと真琴の胸元を見たので、「あたしじゃなくて、お前だお前」と付け加えた。

「あ、これはうっかり！」
自分の制服の上から二つめのボタンが、本来かかるべきボタン穴を三つめのボタンに占拠されて所在なげにしているを発見して貴子は本気で驚く。

「だからいつも姿見で確認しろつて……ひより。手伝つてやつて」

「えい、やだ。めんどくさい」またダレモードに戻りつつ

あつたひよりが、形よくとがったあごをテーブルに投げ出して不順の意を表した。「あたしはばつかに働かせてさ。真琴やつてよ。真琴」

本日三度目のキーボード毆打の音が響く。

「お前働いてないだろ！ それにあたしは発注作業してるの！ 仕事してるの！ 忙しいの！」

「いいなー、チーフ楽そうで。いいないいなー」

「つたくもう。あんたホント文句ばつか……時給たつた五十円プラスの手当てでこき使われる身にもなれつて……つて、電話だ。ハイ。もしもし、ウエダです。あ、店長ですか。ハイ、ハイ、ええそれでしたら……」

話途中でかかってきた携帯にがらつと口調を変えて応答する真琴。それを見てひよりはまた「チーフずるい。仕事中に電話。あたしにはするなつて言つてるのに」

とぶつくさ言い続ける。

「店長からだつての！」電話が終わり、ようやくひよりに言い返した。「まったく、もう。あんた髪以外の身だしなみチェックだけは完璧なんだから、貴子の格好、ちゃんとやれつて言つてるの！ チーフ命令！」

「あく、も。しゃーないいなー」いかにもめんどくさそうにやつと顔をテーブルから上げて貴子に手招きした。「ちよつとこつち来いつて……もつとしゃがまないとやりにきだろ。ボタンかけ違いつてあんたは子どもか。ほら、えりもひつくり返つて……こんなとこにしわ作るなつて」

文句を言つてるわりには、ひよりは細かく貴子の着衣の乱れを細かく直してやつていた。

「ほらできた」さつきまで乱雑だつた着衣が嘘のように整つた貴子を前に、ひよりは勝ち誇る。「この店のファッションリーダーたるあたしにかれば、山猿だつてざつとこんなもんよ。カンベキ！」

「ひどつ！ あたしサルじゃないよ！」

「マジおこなつてば。たとえだつてば。たとえ」

「あ、そうだつたんだ。なーんだ」ちつとも弁解になつてない弁解に、あつさり丸め込まれる貴子。そこらへんが山猿の山猿たるゆえんだらう。

そのやりとりにあきれ顔な真琴が、ボソツと口を開く。

「完璧つて言うなら、まず髪をくくるだけじゃなくつてまとめるかなんかしろつて。そこだけバリバリ規定違反なんだけど」

それを聞き、ひよりの動きがびたつと止まつた。かと思つと、電池が切れたみたいにまた机の上にはたつとつつぶした。

「やる気なくしたー」

そう言つて手のひらだけひらひらとかがさず。

「あんた最初からやる気なかつただろ！ もういいから帰れ！」

「いや、そんなこと言つていいの？」まつすぐ立てた人差し指を左右に振りながら、テーブルと顔の隙間から、ひつひつひつ、と悪党笑いが漏れてくる。

「どういう意味だよ？」

「今日このシフト、この店はあたしたち三人だけ」立つてゐる指が三本になる。「そしてキッチンができるのは真琴、

あなた一人」

また一本に戻った指を向けられ、真琴はきよんとした顔をして。「だから?」

「つまり、あたしがいなけりゃフロアは自動的に貴子一人に!」勝ち誇った人差し指が頭上でくるくる輪を描く。

「うわ! そりやまずいわ!」

「えく?」と貴子が口を尖らせて抗議。「あたしだってちやんとできるもん。お皿だってこないだ両手で三枚同時に持てるようになったもん」

「でも平らに持てなくて汁こぼしてばっか」

「オーダーも入力ミスが多くてロスがしょっちゅう出てるんだけど」

貴子撃沈。「へこむ」とひより同様テーブルにつつぷす。

「うくん、たしかに結構リスキー。それと貴子。落ち込んでるんだったらPOSの使い方復習しときなよ」

追い打ちをかけられさらにへこむ貴子と逆に、ひよりは得たり、とばかりにへっへっへと笑いながら顔を上げた。そして親指で自分をさす。

「ほらほら。イザというとき役に立つ女ですぜ、あたしは」

「だからイザという時じゃなくて今役に立てよ。できるんなら最初からやれよ」

「いーじゃん。どうせ客なんて来てないんだし。せめてケータイ持たせて、ケータイ。ヒマで死ぬ」

「ヒマじゃ死なない。それにあなたに仕事で携帯持たせたら、ずっとメール打てるかゲームで遊んでるかでしょ」

「いーじゃん。今だってどーせ仕事してないんだし」

「開き直るなよ!」

「あたし悪くない。ヒマなのがいけない」

「また開き直る」

「ギャクなんて来るわけないじゃん。シューマツなんだし」

「あ、そーいえばさー」出し抜けに貴子ががばつと顔を上げる。根が単純なだけに、すでに撃沈のダメージは忘れてしまったようだ。「真琴のケータイって変なカタチだよなー」

「ああ、これ?」質実剛健な付属ストラップだけが付いた携帯電話を、ポケットから半分だけ引き出す。「スマートフォン。こないだ出たヤツ。丁度機種変のタイミングだったし、変えちゃった」

「あく、なんかテレビで見たく。社会人とかが使ってるよね。パソコンみたいなつかえるんでしょ?」

「PCとはちよつと違うんだけど」

「あたしはやだなー。それって高いじゃん。カワイくないし」

「あたしがこういうの好きだからいいの!」

「えく? あたしはカッコイイと思うよ? デキるオンナってカンジで」

「ま、いいけど。あたしもケータイ変えたいんだけどさ。ファミ割だからキャリア変えられなくていいのがないんだよね。そういえば貴子、あなたケータイって持ってないんだっけ? 番号とアドレスもらってない気がするんだけど」

「あるよ？」

「どんなの？ 見して。メアドと番号も交換しようよ」

「あ、それならあたしも」真琴がマネージャールームから身乗り出す。

「めずらしー。真琴そういうのキョーミないじゃん」

「別に興味ないわけじゃないって。それに遅刻のたびに貴子んちの家の電話しか知らないの不便だし」

「だったらあたしにもおせーろよ」

「ヤダ。あんた空気読まずにメールとか電話とかして来そうなんだもん」

「いーじゃんかよー。おしえろよー」

「ああ、もう鬱陶しい。くつつくな！ このバカはどうでもいいから貴子、番号とメール教えてよ」

ひよりを引きはがそうとしている真琴はそういうが、貴子は困った顔をしていた。

「あたしの、そういうんじゃないんだけど」

「そういうのじゃないって、いまどきメールができないとか？」

「家族通話専用とか？」

まだくつつきあつてる二人に「ちがうよ」と首を振ると、論より証拠とばかりに、ポケットの中から引っ張り出してみせた。

妙に膨らんだポケットから出て来たのは、白い紙コップの底に風糸がつけられた……

「糸電話かよー！」

二人の声が綺麗に揃った。